

# 教科でキャリア教育

松江農林高校（島根・県立）

第58回  
音楽

今号の先生

音楽  
広戸 菜里先生

大学の教育学部で音楽を専攻し、島根県の高校教員に。自身は小中高と合唱部だったが、初任校から吹奏楽部の顧問となり、外部の講座にも通い、指導方法を学ぶ。島根県高等学校音楽教育研究会で授業のしなを教員仲間と研究。現在は研究部長に。現任校で探究情報部の部長も務める。

## 音楽について「どう感じるか」「どうしたいか」 実感を大切に、意志をもって探究する人になる

「違い」や「迷い」に出会い  
生徒の心が動くような授業を

生徒の「心が動く」ところから出発する。

島根県立松江農林高校の広戸 菜里先生は、音楽の授業でそこを一番大事にしている。

1学期終わりの「音楽I」の授業では、1年生が「自分の気分・感情・情景」をテーマにしたプレイリストを作成した。どんなときに、自分はこの楽曲を聴きたいと感じるか。「泣きたいとき」「試合前」「夏の帰り道」などシチュエーションを各自で考え、その状況に合う楽曲を選んでプレイリストにしたのだ（写真下）。

夏休み明けの授業では、自作プレイリストを生徒同士で紹介した。ペアになり、リストの意図を伝え合うことを数回くり返し、同級生の推す多様な曲にふれる。各自のプレイリストをみんなで歩き回って眺め、「同じ雰囲気プレイリスト」や「同じ曲」を探すこともした。よく似たプレイリストを発見！ とはいえ互いの選んだ楽曲の傾向は違った。同じ曲を発見！ でもそれを聴きたいシチュエーションは異なっていた。人それぞれに音楽の感性は違う、ということがおのずと見えてきた。

次に「3つの声」を聴き比べた。音楽室のモニターを裏向きにし、詳細不明の動画を再生。音だけ聞こえるなかで広戸先生が「声にどんな違いがある？」と問う。生徒たちは数人のグループになり、力を含わせて「感じたこと」を言語化した。1つ目の声は柔らかくて太い、2つ目の声は強くて細くて「ヨロヨロ」している、3つ目の声は



生徒のプレイリストは、図書館の壁にも掲示。どの楽曲をどんなときに聴きたいと感じているのか、「自分の言葉」で付記し、「雰囲気」に合う画像もAIで生成して添付。自分の音楽の感じ方を「見える化」する取組でもある。

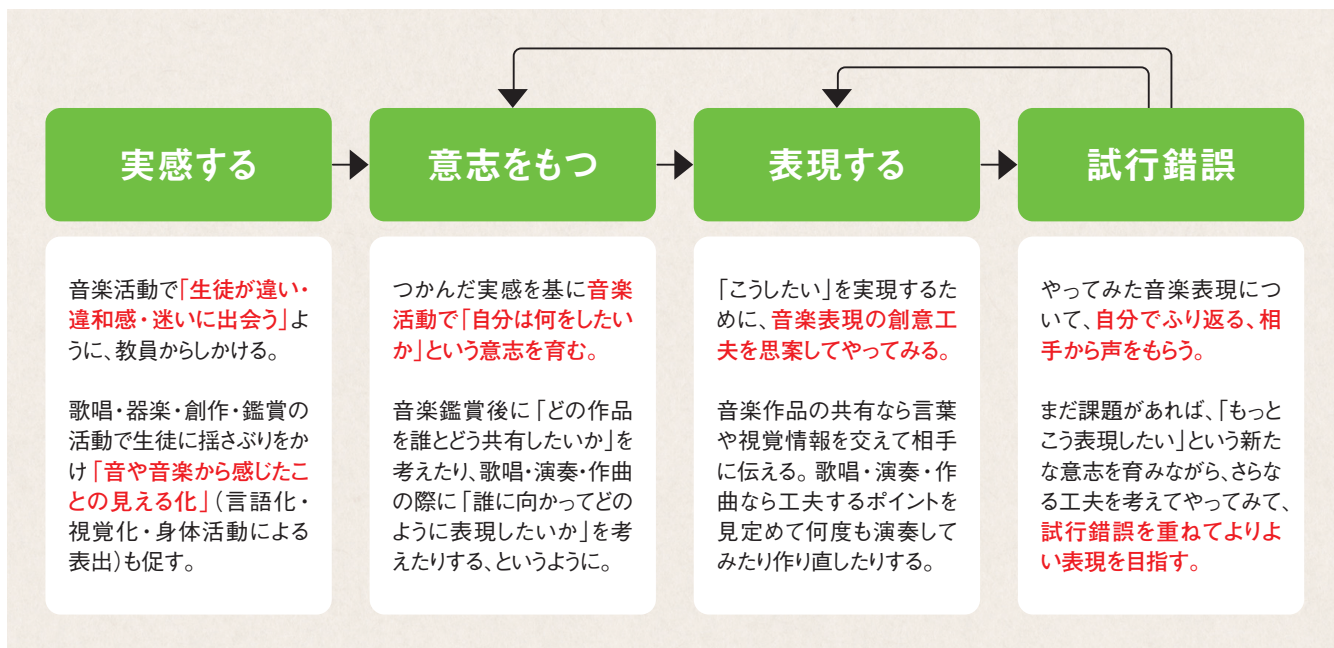
低くてもっていて分厚い…。

そうして違いを捉えてから改めて動画を視聴した。3つの声は、日本の高校生による合唱と、地声で歌うのが特徴のブルガリアの女性合唱、仏教の儀礼で唱えられるチベット声明だった。「どれが一番うまい」と思ったかの投票をすると、生徒の支持は割れた。広戸先生が目をはかやかせた。次回の授業でその理由を訊くと予告し、最後に付け加えた。「ところで、今の3つって…全部『歌』と言えるの？」

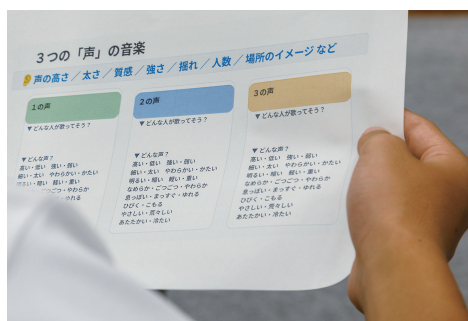
続きの授業。3つの声の「うまさ」を生徒たちはこう考えた。日本の合唱は、まとまりがある。ブルガリアの合唱は、力強い。チベット声明は、一人の声なのに迫力。そこから「系統が違う」という意見が出て「うまい、美しいにもいろいろある」という話に。広戸先生が再び問う。

「うまい」「美しい」ののさしは「一つじゃないんだね。じゃあ、ある声が『歌かどうか』はどこで判断する？」そもそも『音楽か

図1 「心が動く」ところから始める音楽の授業



「声」の感じ方について、生徒から出た意見をホワイトボードに記し、それを基に裏声などの解説をする広戸先生。授業全体の設計はあるが、生徒の反応に合わせて臨機応変に進めることを重視している。



「声にどんな違いがある？」と問うだけでは、生徒がうまく比較できないことがある。だからワークシートで、声の高さ／太さ／質感／強さ／揺れ／人数／場所などの着眼点も示し、思考の深まりを促す。



流れた動画が「音楽かどうか」を○か×の札を掲げて選ぶ。両方掲げて「迷う」の意思を示す生徒も。広戸先生がなぜそう思うか尋ね、生徒が答えるなかで「音楽かどうかは何かで決まるのか」を考えた。

どうか「は何で決まるの？」

この謎に迫るべく、生徒はまたいくつもの動画を視聴し、「これは音楽かどうか」を考え、○×いずれかの紙を掲げて答えた。

1つ目、ロックバンドのザ・ビートルズがライブで届けた「Hey Jude」。全員が音楽と捉えた。2つ目、同バンドが発表した「Revolution 9」。混沌とした音で、音楽かの是非は割れた。「音があるから○」「リズムがないので×」と各自が理由を語る。3つ目、交響楽団によるジョン・ケージの「4分33秒」。演奏者は音を出さず、客席の息づかいなど場内のすべての音を作品としたもの。これも○と×で割れた。

視聴を終えてから、広戸先生は自分の考えを伝えた。「人間が意志をもって鳴らす、または鳴らさないものが、音楽かな」と。続けて「みんなの感じ方は無理に変えなくていいと思う」と断り、ただし「へえ、そんな面白い方もあるんだ、と受けとめること

もしていくと、味わえるものが増えるかもしれないですね」と話を結んだ。

**実感したことを大事にして「どうしたいか」を考える**

1年間の授業全体では、音楽を「どう感じるか」だけでなく「どう表したいか」も考えていく。例えば、歌うときの声の出し方や言葉のつなげ方により受け手の感じが違ってくるのを踏まえて、「どう歌いたいか」を考えて練習する。ギターの弦の鳴らし方による音の違いを感じたうえで、「どう弾きたいか」を模索する。歌唱・器楽創作・鑑賞まで含めた活動全体の要点を抜き出せば図1のようになる。

こうした授業で、広戸先生は次のような変化を生徒に起こしたいと考えている。

第一に、「自分がどう感じるか、という実感をもてる」ようにすることだ。

「音楽はもちろん、生活全般において」こ

れは世界ですごくいいと言われているからすごい」と他者の評価を振り所にすると、人任せやAー頼みになってしまします。自分の感性を働かせ、自分の幸せや喜びを見出せるようになってほしいな、と」

第二に、「自分はどうしたいか、という意志をもつ」ように後押しすることだ。

「どう歌いたいか、どこに向かいたいか。そのために何に取り組むか。今の社会では、従来のやり方を引き継ぐだけでなく、『いろいろなものを創る』ことが、子どもたちにも私たちにも求められています。そこで問われるのが意志だと思っのです」

第三に、「未知のものを切り捨てず、受けとめる」という柔軟さを育むことだ。

「自分の感性を大事にしつつ、意味がわからないものを遮断はせず、受けとめて、自分の考えを更新できるような余白をもつ。多様な文化の人と一緒に生きていく現代ではそれも重要だと考えています」

# 感じとる力を育てる スタイルランゲージ for Teachers

音楽で「心が動く」授業を学ぶ  
教師のしかけ Ver.1



広島県立広島高等学校音楽部

授業実践の工夫をまとめた冊子。  
歌唱・器楽・創作・鑑賞の各分野  
の「心が動く」しかけが満載。

現任校の吹奏楽部の定期演奏会のポスター。テーマ設定から演出や広報まですべて生徒が担当。



定期演奏会の一場面。生徒が自分たちで決めたテーマに沿って、ストーリーを練り、楽曲を選定。各楽曲について、演奏メインの曲、ダンスやスピーチを交えた曲など、演出も考え、背後のスクリーンの映像も工夫した。

## 授業ができるまで

どう感じたか問うだけでは  
生徒の感性を刺激できない

広戸先生は、中学時代、テレビ番組のように工夫された音楽の授業に魅了され、自分もこんな授業をつくらせたいと感じた。幼少期からピアノを習い、将来は音楽の仕事をしたかったので、これを機に教員を志すようになる。大学の教育学部を経て、地元島根県で教員になった。

初任校では衝撃を受けた。授業で扱った楽曲について「どう感じた？」と訊くと、「生徒は答えてくれるものと思っていたのに、答えてくれない」ことを知ったのだ。「わかりません」「何も思いません」という期待していたのとは違う反応。

「音楽好きの仲間同士だと、打てば響くように会話が弾むのですが、それは当たり前じゃなかった、と気づいたんです（笑）。趣味趣向から多様な生徒たちに音楽を感じてもらうには、『授業にしかけが必要なのでは？』と思うようになりました」

そうしたときに、県の研修で大阪教育大学の故・田中龍三先生から授業づくりを教わり、感銘を受けた。以来、長きにわたり師事し、VRを活用した鑑賞の授業などの共同研究にも携わってきた。

また、県内の音楽科教員からなる島根県高等学校音楽教育研究会にも参加。その仲間から学んだことも多かったという。現在は広戸先生が研究部長を務め、2025年には「感じとる力を育てる」ための創意工夫をまとめた冊子も作成した。「音楽を感じるためのしかけは、県内の先生方と一緒に探ってきたことなんです」

## どこを目指して、音楽に励み 生徒に何を不得てほしいのか

初任校では吹奏楽部も担当。2校目では大会での成果をより強く求められる吹奏楽部を指導した。そこで広戸先生は違和感を抱く。自主的活動なのに、指示待ちになる生徒がいた。努力しても、大会で結果が伴わないと自分を全否定する者がいた。「自分の軸をもてない生徒がいるのと、私やまわりがそうさせているのかもしれない現状に、なにか怒りが湧いたんです」

だから生徒の主体性を呼び覚まそうとした。吹奏楽部は、公共施設のホールを借りて定期演奏会も行う。「演奏会で今まで誰もやったことがないことをやろうよ」と一席ぶった。定番の演奏プログラムじゃ味気ない。全体をどんなストーリーにする？ その構想をどんな楽曲とどういう演奏や演出で実現する？ 生徒の目の色が変わり、持ち味を発揮しはじめた。

「ここが私のターニングポイントでした」3校目となる前任校では、吹奏楽部の活動を探究活動とつないだ。地元の文化施設を音楽で盛り上げようと、課題から調査し、音楽フェスを企画・実行した。数年後、新型コロナウイルスが蔓延。そこでの経験も広戸先生に指導のあり方を顧みさせた。吹奏楽部の大会は中止。演奏会も中止。活動で目指すものが宙に浮くなか、校内の先生方の尽力で、全校生徒の前で演奏できる機会を得た。生徒たちは、苦渋を一緒に味わった同世代に、この演奏で何を届けるかを真剣に考え、練習に臨んだ。迎えた当日。多くの人が、感涙するほどのパフォーマンスを見せた。

「大会の金賞を目指すとか、他者の評価を得るためにがんばることも、たしかに人の力を高めます。ですがそれ以上に、『自分たちの活動に、自分たちで価値を見出して打ち込む』ことができたときに、人は成長するのではないのでしょうか」

## 生徒の興味関心を基に 資料や人をつなげる

広戸先生と同じ探究情報部に所属し、学校司書として探究の授業に関わり、迷う生徒や、走り出した生徒の資料探しや文献活用を支援しています。広戸先生は、生徒の気持ちを汲みながら探究を後押しされていて、そこに共感します。私が司書を志したのも、生徒の興味関心を出発点に、図書館が最大限生かされるようにしたかったからでした。生徒と「資料」をつなぐほか、留学生など「人」とつながることや、イベントなど「場」を一緒にすることもしています。



学校司書  
宮本和樹先生

## 相手の課題やニーズを 感じるところから探究を

探究の授業デザインを広戸先生と一緒に考えています。今進めているのは、生徒が興味ある分野の「相手を知る」ことから始め、その課題やニーズへの共感を深めてから、できることを考える探究。広戸先生はその実践で、生徒が言葉や行動にできずにいた内なる思いを、一緒に

考えて表出できるように支えることも自然体でされています。相手の課題を理解することは、私の専門教科の福祉でも重要なので、普段の授業にもこの知見を活かしたいと思っています。



福祉  
石原道子先生

## 松江農林高校（島根・県立）



### School Data

創立1900年／生物生産科・環境土木科・総合学科  
生徒数461人（男子185人、女子276人）／進路状況（2026年3月卒業）大学36人、短大10人、専門学校45人、就職53人、その他11人

### Outline

校訓は「質実・剛健」「自主・創造」「奉仕・協同」。農業系学科の生物生産科・環境土木科と、総合学科（食品系列、福祉系列、地域系列）からなり、農業、農業土木、造園、食品、福祉などの産業や文化を支える人材の育成に取り組む。

## 生徒はこう変わる

心が動く、問いが生まれ  
意欲をもち、試行錯誤が始まる

好みでもない音楽にふれたとき、一般的に多くの人は注意深く聴こうとしない。その音楽のすごい点を「説明」されても、もともと興味が薄いので心は動かない。

けれども、3つの声の聴き比べのように、学校の授業でしかけをもつて音や音楽に出会うと、生徒はちよつと興味をもつという。そこから「何が違う?」「どうなっている?」などの問いが生徒のなかに育ち、関心が高まると、教材の音源や動画を何回も視聴したりして、自ら発見もしていく。

歌唱の授業でも、歌い方の工夫を「説明」するのではなく、まずは声の質や歌い方の特徴を生徒が「実感」し、面白がることによって、ようやく歌い方への学びがスタート。そこから「自分はどうか表したい?」を問い、生徒のなかに「こういうふうに歌いたい」という意欲が芽生えたと、以降の練習の主体性が高まっていく。

「温かみのある雰囲気を与えたいから、歌詞をなめらかにつなげて歌ってみよう」とか、それを練習して実践しても、本人の理想にはなかなか届かないのですけれどね。じゃあ、理想とのギャップを埋めるために何かに何をするか、仮説をまた立ててやってみる。仮説を立てるには音楽経験も必要で、だからいろいろな歌唱にもふれて…。そうして自分の目標を追ううちに「気がついたらこんなところまで来ていました」となるような探究の姿勢を生徒が見せてくれると、嬉しくなります」

現任校で広戸先生は、米国のハイニテク・ハイ※を視察して学んだ手法を活かし、教科横断のプロジェクト型学習の開発も進

## 自分の意志をもって みんなで楽しいことをする

——印象的だった音楽の授業を教えてください

藤井さん ギターです。鳴らし方をあれこれ試し、楽しく弾けるように真剣にふざける感じでした。

小室さん VRの鑑賞です。楽団の演奏をまず音だけ聴いて気になる点を見つけ、次にゴーグルをつけてVR映像をみんなが思い思いに視聴しました。

——皆さんは吹奏楽部員でもあるそうですが、定期演奏会はどのように進められたのでしょうか?

田邊さん テーマ設定、曲の構成、演出、照明まで全部自分たちで決めました。まわりが案を出すなかで自分は浮かばない、という葛藤もありました。

小室さん 1年生を含めてみんなの役割も考えて。

平井さん テーマに合わせてポスターを作り、中学校や音楽系のお店に配りました。演奏会では曲によってダンスや歌も入れたので、その練習も。

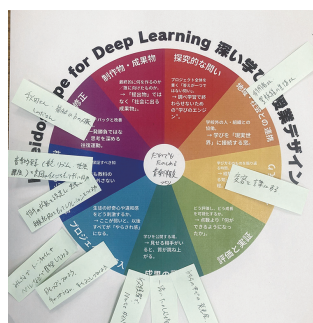
——成長したと思う部分はありますか?

藤井さん 高校から楽器を始めた僕ら男子二人も、演奏について仲間と指摘し合って進めることができて。精神的な強さが鍛えられたと思います。

石川さん 何をするか自分たちで考えてやれるようになりました。広戸先生は、ああしろこうしろではなく、対等に真剣に向き合ってくれる。その先生も含めて、みんなでがんばりたい、と思いました。



前列左から、3年生の田邊真希さん、石川結心さん、小室亜央さん、後列左から、藤井尚春さん、平井成人さん



福祉系列の先生との授業づくり。「だれでもたのしめる音楽体験づくり」をテーマに、「心を動かす導入」や「保証すべき学び」を思案。

## 授業作りのポイント



- ・ 未知のものを切り捨てず、知識だけ得てわかった気にならず、「どう感じるか」を大切にしてほしいです。
- ・ 課題に取り組むときは「自分はどうかしたいか」と意志をもち、他者の評価の獲得だけを指すのではなく、活動に自分なりの価値を見出し、夢中になって試行錯誤し、人として成長してほしいと思っています。

### Point.1 /

#### 心が動くように 揺さぶる

聴いた音や、自ら出した音の「違い」を生徒自身が発見できるようにする。別の存在になりきることなどで「違和感」を味わってもらうなど、心が動くようにするしかけを、広戸先生は今も仲間と考え続けている。

### Point.2 /

#### 感じたことを 見える化する

工夫した鑑賞・歌唱・器楽・創作活動で、生徒の心が動いても、本人が感じたことを明瞭に認識できるとは限らない。だから、感じたことを言語化・視覚化または身体活動で表出させ、「見える化」することも大事にしている。

### Point.3 /

#### 結論を 先回りしない

授業は、生徒の反応や発見を拾って次の問いにつなげる。事前に1コマの展開を計画するが、想定以上に盛り上がったときなどは、予定の流れに強引には戻さず、時間をかける。結論を教員から提示しないために。

### Point.4 /

#### 表現意図を 評価する

歌唱や器楽では、自分の目指したこと(温かみを伝えるなど)をパフォーマンスで実現できたかを、技能として評価。併せて「こう表現するために、こう工夫した」という意図をもって取り組めたかもしっかりと評価する。